欧州から
ニッポンをみる

268

『大相撲　国技はグローバル化でどう変わるべきなのか』

在仏コラムニスト 安部雅延

モンゴル力士で岐路に立つ

　横綱だった日馬富士が同じモンゴル出身の前頭8枚目・貴ノ岩を暴行した疑惑で日本の相撲界は大揺れになった。実はフランスでも日本の大相撲は人気が高く、衛生やケーブルTVで毎場所のダイジェスト版をその日に観ることもできる。

　フランスのシラク元大統領が大の相撲好きで、特に貴乃花ファンだった。一方、今回の一連の騒動でモンゴル国内で英雄的存在になっている日馬富士が引退に追い込まれたことで、日本とモンゴルの外交問題にまで発展している。

　日本国内では、誰が責任を取るべきかとか、相撲協会の古い体質や慣習への批判が高まっているが、個人的には問題の核心に迫る議論がされていないように思えてならない。

　なぜなら今回の騒動は、過去の八百長や相撲部屋での親方や先輩力士による暴力（可愛がり）問題とは、次元が異なっている。なぜなら、今の相撲ブームを支えているのが日本人力士ではなく、モンゴル人など外国人力士だからだ。

　大相撲は日本古来の奉納相撲を起源に持ち、江戸時代に高位の強い職業力士たちによって行われる神事としての武道にルーツを持ち、今は興行によって、その伝統武道が現代社会で市民権を得ている。

　つまり、歌舞伎同様、大相撲は興行の側面が強く、相撲ファンによって成り立っている。これは興行に頼らない柔道、剣道、空手など日本の伝統的格闘技とは異なった性格を持ち、その興行的側面が話を複雑にしている。

　しかし、多額の興行収入をもたらす力士への手厚い報酬ゆえに、モンゴルなどから大挙して力士が来日する結果も生んでいる。これはたとえばアメリカのバスケットボール選手や野球の大リーグ選手がメキシコなどから押し寄せる現象に似ている。

　長く低迷が続いた日本の相撲界は、朝青龍を始め白鵬など次々に表れるモンゴル人力士で活気づき、一気に相撲人気が高まった。相撲は何人かの圧倒的に強い力士で盛り上がる。

　相撲は勝負の世界である以上、勝ち負けが全てを支配する。無論、その戦いは、一定のルールによるもので、柔道に技やルールがあるように相撲にもルールが存在し、加えて伝統的な礼儀も存在する。

　そこで疑問は、果たして日本とは異なる文化的背景を持つ人間に、相撲道の背景にある日本の伝統的精神や礼儀、モラルを教えることは可能なのかということだ。この問題は、すでに柔道や剣道、空手が先陣を切ってグローバル化に挑戦した過去がある。

　約30年前、急速に世界に広まった柔道について、日本の柔道界の中に懸念の声が聞かれるようになった。当時、日本で雑誌編集者をしていた筆者は全日本柔道連盟の幹部から、その危機感について聞いた事がある。

　当時、大学の柔道部で暴力事件などの不祥事が相次ぎ、柔道の荒廃が指摘されていた。話を聞いた人物は、冗談まじりに「柔道を世界に広めなければ、こうはならなかった」と言い、柔道のルールが日本人の手の届かない所に行ってしまったことを歎いていた。強さばかりが強調され、柔道に流れる礼節が軽んじられたからだった。

何を伝え残していくのか

　国際柔道はオリンピック競技となり、日本の柔道人口が約16万人なのに対して、人口6千万人のフランスの柔道人口50万人、フランス人の中には「柔道はフランスの国技」などという人もいる位だ。ブラジルの柔道人口かは200万人に達している。

近年のオリンピックの柔道の試合は、細かい技でポイントを稼ぐルールのために、選手は相手にポイントを取られないために逃げ回るような柔道になり、日本人には違和感があった。最近、ようやくルールが改定され、1本勝ちの本来の柔道に戻りつつある。

しかし、柔道の背後にある礼節がどこまで世界に普及しているのかは疑問だ。なぜなら、格闘技はあくまで、相手を倒す強さが重視されるからだ。負けた選手が納得できずにお辞儀をしないで退場する光景をオリンピックでも時々見かける。

世界中の柔道愛好家への調査で、柔道の修練を受ける彼らの動機の上位は、「身体の鍛錬」（17％）、次いで「精神修養」（15％）で、実際に柔道を初めた結果、約28％の人が精神力の向上に役立ったと答えている。

今回の大相撲の騒動で、興味深かったのは、モンゴル力士の草分け的存在の小結、元旭鷲山の発言だ。彼は「相撲稽古での、しごき（通称、可愛がり）は徐々にしかなくせない」「なくしてしまったら日本の相撲が相撲でなくなる」と言った。

元旭鷲山は1991年に来日し、彼によれば、当時の稽古場には竹刀だけでなく、スコップもあって弟子たちは殴られながら稽古し、モンゴル語を喋っただけでも殴られ、罰金を払わされたという。それでも厳しい稽古に耐え、朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜の4横綱を生んだ。

日本人が知識として持っているモンゴル人は、チンギスハンの頃の勇猛果敢な遊牧民族のイメージで、今は大の負けず嫌いとして知られる。もし、元旭鷲山が経験した厳しい稽古を後続のモンゴル力士が耐えられずに音を上げていたら、上位にモンゴル人が食い込むことになかっただろう。

無論、辛い稽古の後にモンゴルでは考えられない報酬が得られることもモティベーションの一つだろうが、モンゴルの若者を魅了する大相撲の厳しい稽古の世界は、モンゴル人に受け入れられる範囲内で、スコップで殴られるくらい、強くなるためには我慢すべきこととしか受け止められていないと推察される。

モンゴル人が理解した大相撲の伝統の中には「可愛がり」も入っており、それはモンゴルでもありうることだ。逆に日本では過去に認められていた「しごき」が暴力と捉えられ、なくす方向にある。むしろ、今の相撲界の変化に一番戸惑っているのはモンゴル力士を始め、外国人力士かもしれない。

多分、モンゴル人力士は大相撲を屈強な人間だけに与えられた勝負の世界と捉え、勝つことが全てと理解し、伝統の意味は、そこまで理解していないと考えられる。強い者こそ模範的な人間で、高いモラルと人格を持つべきとは考えられていないかもしれない。

誰も指摘しないが今回、伝統的相撲道を追求する貴乃花親方に育てられた貴ノ岩が、白鵬の説教が終わったとしてスマホをいじり、日馬富士を苛立たせた態度は、果たして相撲道にかなうことだったか疑問だ。日本の伝統的な先輩後輩の上下関係や親方と弟子の関係には、儒教的礼節が存在している。

それこそが、相撲界が守らなければならないことではないのか。組織の一員であるにも関わらず、上司を無視する態度は、相撲道に反しているようにも見える。それではモンゴル力士に見本は示せない。

つまる所、日本の大相撲は仕切り直しの時を迎えていると思う。何を伝統とし、何を排除するかを明確にする必要がある。これは日本企業の経営スタイルにも同じようなことが言える。